

『土御門院女房』注釈(一)

山崎 桂子

冷泉家時雨亭叢書第二十九卷『中世私家集五』に影印されている新出資料『土御門院女房』(仮題)を読み解く試みである。本文は本紀要(第二十三卷第二号、二〇〇二年一月)に翻刻しており、それに基づいて注釈を施した。内容は、土御門院に仕えたある女房が、院没後に院のことを懐古して記した日記風の作品で、和歌四十三首(長歌一首)を含む。土御門院の土佐から阿波への遷幸時期をめぐる記述など、歴史資料としても注目される。作者は家隆女である小宰相の可能性が高いが、確証は得られていない。

〔キーワード〕 土御門院女房、承明門院小宰相、家隆女

はじめに

冷泉家時雨亭叢書第二十九卷『中世私家集五』¹⁾に影印された新出資料『土御門院女房』(仮題)については、既に本紀要にその全文を翻刻、紹介している。²⁾また、作

品の構成と内容、作者の手がかりについても別に稿をなしたが、³⁾本稿はより詳細な内容理解のため本文に注釈を施し、全体を読み解こうと試みたものである。

この作品は和歌が文章よりも一、二字分下げて書かれており、書写形態からすると日記風の作品であるが、主

体は和歌で、地の文は概ね簡略である（特に後半部は地の文が短くなっている）。従って歌集と見て「土御門院女房集」と呼んでもよいのではないかと私の私案を呈した。⁴

しかし、本資料の書写は鎌倉中期で、作者自筆原本の可能性も一応考えられようが、たとえ転写を経ていても、書写者が親本の書写体裁をみだりに改変するとは思われないから、原本もこのような体裁で書かれていたとみるべきであろう。するとやはり作者の意識としては歌集ではなく散文（日記）であったのだろう。書陵部に孤本として蔵される『信生法師集』の前半部と後半部の書写形態の相違なども思い合わされるところである。

冷泉家時雨亭叢書に於ける井上宗雄氏の解題以降、この作品にいち早く言及されたのは田渕句美子氏⁵である。

氏は、本作品同様冷泉家に所蔵され、近時相次いで時雨亭叢書に影印された『秋思歌』⁶『御製歌少々』⁷も故人を追悼する内容の作品であり注目されること、就中『御製歌少々』は和歌が地の文より一字下げて書写されており、本作品と共に「歌集的な日記」と言うべきものであるこ

と、を述べられている。

かつて樋口芳麻呂氏⁸は菅原孝標女の家集の存否を論じられた。すなわち季吟が『八代集抄』で作者名の下に家集の伝存を注記するのは「家集の日記を残す孝標女と、日記的家集を持つ右京大夫の二人にすぎない」ことを証され、「型にはまった家集でないからこそ、家集ありと季吟はことわっているであろう」とされている。本作品も『更級日記』『建礼門院右京大夫集』と同様な性格を持っている。家集の日記なのか、日記的家集なのか。前述の如く書写形態に見られる作者の意識を重視すれば、田渕氏も言われるように「家（歌）集の日記」というのが妥当なところであろう。私案は「土御門院女房日記」と訂した方がよいのではないかと現在は考えている。⁹ 紆余曲折したが、注釈にあたり、本来の書名の有無さえも不明なこの小作品を文学史に位置づける第一歩として、まずは書名を与えてやりたいというのが本意である。

尚、本稿を成すにあたって田渕句美子・兼築信行両氏による「順徳院詠『御製歌少々』を読む」¹⁰を注釈の形態

など多くの点で参考に使わせていただいている。

本文の翻刻部分については財団法人冷泉家時雨亭文庫より翻刻許可（時雨亭第H一五—K—二六号）を得ている。許可を与えられた同文庫に感謝申し上げる。

現在までに気づいた翻刻の誤りを次のように訂正する。

25才の二箇所は弓削繁氏の御教示によるものである。

5ウ いて、て↓いて、

7才 さしもぬるらめ↓さこそぬるらめ

25才 みか月をふみ↓みか月を、かみ

25才 かけたにみ「す」□↓かけたにみ「むと」

注

(1) 平成一三年四月、朝日新聞社。解題は井上宗雄氏。

(2) 「新出資料『土御門院女房』（冷泉家時雨亭文庫蔵）の翻刻一」（志學館大学文学部研究紀要）第三三卷第二号、平成一四年一月

(3) 「冷泉家時雨亭文庫蔵『土御門院女房』の構成と内容―作者の手がかりを求めて―」（『中世文学』第四八号、平

成一五年六月）

(4) 注(3)に同じ。

(5) 田淵句美子・兼樂信行「順徳院詠『御製歌少々』を読む」（『明月記研究』七号、平成一四年二月）の研究篇（田淵氏執筆）。

(6) 冷泉家時雨亭叢書第十卷『為家詠草集』（平成一二年一月、朝日新聞社）。解題は佐藤恒雄氏。

(7) 冷泉家時雨亭叢書第三十卷『中世私家集六』（平成一四年六月、朝日新聞社）。解題は井上宗雄・浅田徹氏。

(8) 樋口芳麻呂「菅原孝標女の採集収載歌―「家集」の存否を中心に―」（『愛知淑徳大学国語国文』一一号、昭和六三年一月）

(9) 田淵句美子氏もその後の「鎌倉時代の歌壇と文芸」（近藤成一編『モンゴルの襲来』平成一五年二月、吉川弘文館）では「女房日記」として位置づけられている。

(10) 注(5)に同じ。

注 釈

凡例

一、和歌にかかる前詞（地の文）を詞書と見て和歌を単位として区切り、段落番号を付し注釈を施した。

二、本文は翻刻に基づいて清濁を分かち、地の文には句読点を

付した。歴史的仮名遣いと相違する箇所や漢字の読み等を示す必要のある箇所にはルビの形で傍記した。但し、欠損が多くて意味のとりにくいところは手を加えていない。

三、〔語釈〕〔現代語訳〕〔補説〕の順に項目を立てて注釈した。記すべき内容のない項目についてはこれを省略した。また、欠損の多い冒頭部分については、〔現代語訳〕を〔大意〕とした。

四、注釈の各項目に引用する和歌の本文と番号は『新編国歌大観』に拠った。但し、和歌表記には漢字を当てたところがある。

【一】

□□□□四にて位につか□□「お」はしまして十二□□□□。

その、ち十年□□□□もいて□る時なく□□□□「かた」じけなくたのみ□きまいらせしに、一□□□る「か」に御わたり□。さきのよの御※□をやわかち給はらせお□□「し」ましけむも、□□□□へときこえさせ□□□□□□□□これもと□□□□て、御いでたちあり。□らす御ともすべきみ□□おもひさだめなが「ら」、□まのおそろしさ人□□□□めかみにて、のこりと□心地せむかたなし。

①みにかへておもは「ぬ」□□しもなきもの□とまるはをしきいの□なりけり

〔語釈〕▽四にて位に：土御門天皇は建久六年（一一九五）降誕。同九年正月十一日四歳で受禪。三月三日即位。▽十二：承元四年（一一二〇）十一月二十五日十六歳で讓位。従つて在位は十二年。▽その、ち十年：

讓位の後、上皇として十年。▽御わたり：承久の乱による遷幸全体をいうか。▽御※：※字不読。▽御いでたち：承久三年（一一二二）閏十月十日の土佐への出立を言うか。▽①：「みにかへておもはぬとしもなきものをとまるはをしきいのちなりけり」か。「おもはぬとしもなきものを」では少し表現がおかしいか。▽みにかへて：我が身の命にかえて。「花を惜しむ」又は恋の主題に多く用いられる表現。「身にかへてあやなく花を惜しむかな生けらばのちの春もこそあれ」（拾遺集・春・五四・長能）「身にかへて惜しむにとまる花ならば今日やわが世のかぎりならまし」（詞花集・春・四二・俊頼）。

〔大意〕

四歳で位にお即きになって十二年間世を保たれた。その後十年間上皇であられた。恐れ多くも頼りに申し上げていたのに土佐へお遷りになることになった。

〔不明〕。御出立になった。きつとお供する身と思いついていたが、「不明」都に残りとどまる心地は辛いがどうしようもない。

①我が身の命に代えても都にお留めしたいと思わぬわけではないが、それも叶わず、都に留まるとは残念な我が命であるよ。

〔補説〕土御門院の承久三年閏十月までの経歴を述べた冒頭。「本朝皇胤紹運録」等の記述と合致しており、読者を意識した土御門院の紹介という印象を受ける。本作品全体の序の形になっている。

〔2〕

□□月御くだりにて□□ほりかはの堂□あからさまにわたらせ□します御ともにまいり□れば、たゞいまばかり

ぞ□しとおもふに、しる□□やとのみ覚えて、

②いで、いなんすがた□みてもいかにせむ□□さきだ
ついのちと「も」□

〔語釈〕▽□□月：「閏十月」か。▽御くだり：土佐への下向。▽ほりかはの堂：未詳。中宮篤子が堀河天皇の御在所であった堀河院の西の対に仏像を安置し、御堂となして供養したことが『長秋記』永久元年（一一一三）年七月二十四日条に見える。それを指すか。しかし「御堂」ではなく「堂」とのみ記されていることや何の為にそこに寄ったのか等、不審。或いは「堂」は仮名「た」と読むべきか。下が欠損しているのではないが、「あからさまにわたらせ」と続くので場所であることが推測される。▽②：「いで、いなんすがたをみてもいかにせむ君にさきだついのちともがな」か。本作品より後の例だが「あはれそのうきはてきかで時の間も君にさきだついのちともがな」（風雅集・雑下・一九五二・永福門院内侍）があり、下旬の欠損部を推測させる。▽いかにせむ・さきだつ：「い

かにせむ行くべき方もおもほえず親にさきだつ道をし
らねば」（古今著聞集・一一九・小式部内侍／沙石集
他にも）。

〔大意〕

閏十月土佐への下向だといふので「不明」堀河の堂
「不明」にちよつとお渡りになる、そのお供をして参つ
て、「もうすぐ御出立になるのだ」と思うと、「不明」
とばかり思われて、

②ここを出て土佐へ下つてしまわれる御姿を拝見し
ても何になるう。（そのような御姿を拝見するく
らいなら）上皇様に先立って絶えてしまう我が命
であればいいのに。

〔補説〕ここから具体的に出立の日の様子を記す。土御
門院は仙洞から、不審ながら一時堀河の堂に遷り、そ
こから土佐へ下つたことがわかる。作者は堀河の堂ま
でお供をしたのである。これは他書には見えない記述
で注目される（後述）。

【3】

あか月ちかくなりて、心「も」あらねば、

③いづちとも思もわか□あけほのいかでな「み」□
のさきにたつらむ

〔語釈〕▽あか月：夜が明けようとするが、まだ暗い時
間。夜を共にした男女が起きて別れる時間で、ここは
院との「暁の別れ」を暗示すると思われる。▽③∴欠
損部分「思もわかぬ」「なみだの」か。「いづちともし
らぬわかれのたびなれどいかで涙の先にたつらん」
（後拾遺集・別・四九二・中原頼成）に依拠した詠で
初句と下句は同じ。▽あけほの∴暁の次の段階。夜
がほのかに白んで明けてくる頃。▽いかでな「み」□
の∴この表現は「うらむべきかただに今はなきものを
いかで涙の身に残りけん」（和泉式部集・五七二）「何
事も心にしめてしのぶるにいかで涙のまづしりにけん」
（同・七〇〇）からの影響があろう。

〔現代語訳〕

いよいよお別れせねばならない暁近くなって、心も平

穩ではいられなくなったので、

③お下りになるのはどちらの方角ともわからないし、

悲しみに分別も出来ないでいるこの曙に、どうし

て涙が賢くも行く先を知っているかのように先に

立って流れるのだろうか。

〔補説〕頼成歌の剽窃と思われるような本歌取りと、和

泉式部歌からの影響は本作品の特徴である。前記注

(3) 論文参照。

〔4〕

御こしよるほどには□さぶらひあはれたる人□なくけしきのき□れば、ことほりにかなし□て、

④ありしにもあらぬ□ゆきと思にもつら□□そではさ

こそぬるらめ

〔語釈〕▽御こし…輿には輦輿と腰輿がある。ここは後

者で手輿とも言う。『増鏡』に「いとあやしき御手輿

にて下らせ給ふ」とある。▽さぶらひあはれたる人…

見送りに伺候している人。▽き□れば…「きこゆれば」

か。但し「けしき」はほのかに見えるものについて言

うので「けしきのきこゆれば」では不審か。▽かなし

□て…「かなしくて」か。▽④…欠損部分「あらぬみ

ゆき」「つらぬるそでは」か。「つらぬるそで」は「紫

の袖をつらねてきたるかな春立ことはこれぞうれし

き」(後拾遺集・春上・一四・赤染衛門)のように禁

中に文武百官が並み居る様を言う。▽ありしにもあら

ぬ…かつて行幸の時にはこのように臣下が袖を連ねた

のだが、今回はそれとは違って変わった御幸であるこ

とを言う。「露きえしあとは野原となりはててありし

にもあらずあれはてにけり」(建礼門院右京大夫集・

一三三)

〔現代語訳〕

朝になり輿が寄せられる時分には、伺候していらっしや

る人「不明」泣く様子が聞こえてくるので、当然のこ

とながら悲しくて、

④昔とは似ても似つかぬ御幸だと思うにつけても、

居並ぶ人々の袖はさぞかし涙で濡れていることで

しよう。

〔補説〕土御門院出立の様子は、『六代勝事記』によれば「仙洞は唯はつしぐれのふるさとのみかきくもりたれば、あくるをつぐるとりのねに、土御門の大納言御車よせて、君も臣もなくよりほかのことなし。すゑより御こしにめしかへて御覧じ行道すがら」と記されている。「仙洞」は同居していた承明門院の御所（土御門殿）を指すので、ここで大納言定通（後述）と別れを惜しんでいることになる。しかし、本作品では「堀河の堂」に一旦遷り、翌朝そこから別れを惜しんで下つたように書かれている。『六代勝事記』の「すゑより御こしにめしかへて」が本作品の「堀河の堂」からの出立を指すのであろうか。すると仙洞で定通らとの別れがあり、本作品の作者らが供をして「堀河の堂」まで行き一泊、翌朝そこで最終的に見送つたものか。『六代勝事記』によれば、院はこの後、陸路で須磨・明石の関・尾上を通つて室津に着き、そこから船で屋島・松山を望みながら四国に渡り、再び陸路で土佐へ

至つたことになっている。

【5】

土御門殿にかへりまいりて、ひるの御やすみ所の御ざとりのけ、うちはらひなどする心ち、なみだにむせびておぼゆれば、

⑤かはりゐるかりのよどこのちりばかりおもはざりき
なかゝるべしとは

〔語釈〕▽土御門殿：承明門院の御所で土御門南万里小路西にあつた。土御門院はそこに母女院と同居していた。作者はここに院の配流前も後も居住しているようである。▽ひるの御やすみ所の御ざとりのけ：昼の御座所の御座を取り除く。院がいなくなつたので片づけているのであろう。▽⑤：「かはりゐるちりばかりだししのばなんあれたるとこの枕なりとも」（和泉式部続集・二〇七、正集・二〇〇）「かはりゐん」「しのばじな」「枕みるとも」「とまるらむふるき枕にちりはゐてはらはぬ床をおもひこそやれ」（建礼門院右京大

夫集・一〇四)「みがきこしたまのよどこにちりつみ
てふるき枕をみるぞかなしき」(同・一〇六)。▽かは
りあるゝちり…土御門院の代わりに床に積もっている
塵。床や枕に塵が置くのは空闊となること。▽かりの
よどこ…仮の夜床か、不明。前詞で昼の御座を片づけ
た事を記しているのか、昼の御座のことを仮の夜床と
言っているのか。不審。

〔現代語訳〕

土御門殿に帰ってきて、昼の御座所の御座を取り除き、
塵を打ち払ったりする心地は言いようもなく、涙で胸
がつかえる気がするので、

⑤上皇様の代わりに積もっている仮の夜床の塵ほど
も思わなかったことだよ、このようなことになろ
うとは。

〔補説〕和泉式部歌と共に『建礼門院右京大夫集』から
も影響を受けていることが明らか。前記注(3) 論文
参照。

〔6〕

土さへ御わたりあるに、

⑥人かずにけふはゆくともわびつ、はかへるもとさと
おもはましかば

〔語釈〕▽人かずにけふは…「人かずにけふはかさまし
からころも涙にくちぬたもとなりせば」(建礼門院右
京大夫集・二八一)。

〔現代語訳〕

土佐へ御遷幸になるので、

⑥自分も人数の内に入って今日はお別れに行つて、
土御門殿に帰つて来たのだが、気落ちしつっ思
うことには、どうせなら院の配流地土佐に帰るのだっ
たらよかつたのに、と。

〔7〕

ちかくわたらせ給べしとて、阿波へ御わたりあるべしと
きくにも、

⑦なにと又なるとの浦のうらわたりあはれやなにのむ

くひなるらん

〔語釈〕▽なるとの浦：阿波国の歌枕。鳴門海峡。▽うらわたり：「つな手引くなだの小舟や入りぬらん難波のたづの浦わたりする」（堀河百首・二三四七・国信）のように、普通は鶴や千鳥などが海辺に沿って飛ぶことを言う。ここは院が「阿波へ御わたり」あることに掛けている。▽⑦下句：「ちぎりあらば思ふがごとぞ思はましあやしや何のむくいなるらん」（和泉式部集・五四三）。都に近い阿波へ遷ることは喜ぶべき事なのだが、ここは土佐も阿波も含めて配流自体を憂えているのであろう。

〔現代語訳〕

都の近くにお遷りになるのがよからうというので、後には阿波に御遷幸になるはずだと聞くにつけても、

⑦ どうしてまた鳴門の浦におわたりになつたりなさるのだろう。お気の毒なことに、これは一体何の報いなのだろうか。

〔補説〕土佐から阿波へ遷つたのは幕府の配慮であった

らしく、『増鏡』に「せめて近き程にと東より奏したりければ、後には阿波の国に移らせ給ひにき」と記されている。その時期は『吾妻鏡』によれば貞応二年（一二三三）五月である。本作品では土佐下向を見送ったすぐ後に阿波遷幸のことが書かれており、作品内の時系列を乱すようにも見える。この点については前記注（3）論文参照。

ここまでの流れを整理すると、【2】は堀河の堂に渡った日、【3】【4】は院を見送った場面、【5】はその日土御門殿に帰って来てから。【6】には「人かずにけふはゆくとも」とあるので、時間的に【5】に続く同日のこととみられる。【7】も【6】の地名「土佐」に続いて「鳴門の浦」を詠んだもので一連であらう。

【8】

ひむがしむ（補入）きの御つぼにくれたけをうへられたる、みいだしてふしたれば、風のふくにあはれもせむか

たなし。

⑧よろづよのともとぞうへしたけのはに□とりかなし

き風わたるなり

〔語釈〕▽御つほ…中庭。坪庭。▽くれたけ…淡竹の一種。「呉竹は葉細く、河竹は葉ひろし」(徒然草・二〇

〇段)。▽ふしたれば…ふし(臥し)は竹(節)の縁語。土語。▽よろづよ…よ(代・世)は竹(節)の縁語。土

御門院の治世の意を含めるか。▽たけのは…竹の葉の縁は長く変わらないものたえ。「白雪はふりかく

せどもちよまでに竹のみどりはかはらざりけり」(貫之集・三三二、拾遺集・雑賀・一一七七)「しぐれふ

る音はすれども呉竹のなによともにも色もかはらぬ」(兼輔集・五二、新古今集・冬・五七六)。▽□とり…

竹の葉の連想で「みどり」かとも思われるが、「ひとり」で、風を擬人化し、「とも(友)」に対比した表現であろう。

〔現代語訳〕

土御門殿の東向きの庭に呉竹が植えてあるのを眺めやつ

て臥していると、風が吹く度に悲しさもこらえようがない。

⑧萬代までの友として植えられた竹の葉に、既に上

皇様の御治世はなく、たった一人悲しい風だけが吹き渡る音が聞こえることだ。

〔補説〕呉竹を見出して臥している〔8〕のだが、

「ねられぬま、に」〔9〕と続く状況は、『更級日記』の次の場面や歌と類似している。

旅なる所に来て、月のころ、竹のもと近くて、風の音に目のみ覚めて、うちとけてねられぬころ、

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめしてなにともなきにものぞ悲しき(四一)

〔9〕

ねられぬま、にありあけの月のくまなきをながめて、つほねのうへくちもたてぬほどに、土御門の大納言殿、女院の御方にまいらせ給て、あか月ちかくなるまでさぶらはせ給て、いでさせ給にや、御つまどあくおとして、中

門のかたへあゆみおはしますに、御ともの人もめさすついでよりみざり給て、ありあけの月をながめさせ給。

梁元昔遊 春王之月漸落

周穆新会 西母之雲欲帰

とながめさせ給をきくに、

⑨みなれこしそのおもかげの恋しさもいかにまことに

ありあけの月

〔語釈〕▽ありあけの月：有明の月で、この段が閏十月

二十日過ぎのことと判明する。▽つばねのうへくち：

局の上口。貴顕の人が出入りするところ。▽土御門の

大納言殿：源定通（一一八八～一二四七）。▽女院：

承明門院在子（一一七一～一二五七）。土御門院生母。

▽中門：寝殿造で東西の対の屋から釣殿に通じる廊の

中程にある門。そこに靴脱ぎや車寄がある。大納言は

牛車を降りて中門から入り、廊を通って妻戸から承明

門院のいる寢殿へ上がり、今度は逆に戻って退出する

ところであろう。▽めさすついで：「ま」脱で、「目覚ます」

か。▽梁元昔遊：『和漢朗詠集』（帝王・六五九・菅

三品）の詩句で、内宴の夜が更けて公卿達が帰ろうと

する様を賦したもの。定通はこの場にふさわしい朗詠

をして風流ぶりを発揮している。▽⑨：「わかれにし

その面かげの恋しきに夢にもみえよ山のはの月」（法

門百首・七〇、新古今集・釈教・一九六〇・寂念）。

為相に「わかれにしそのおもかげのままならばこれや

かぎりのありあけの月」（嘉元百首・一三七〇）があ

り、本作品の披見や伝来を予想させる。結句「ありあ

けの月」は「在り」との掛詞か。歌意はとりにくく、

不審だが試みに訳してみた。

〔現代語訳〕

寝られないままに有明の月が曇りもなく照っているの

を眺めていて、まだ局の上口も閉めていない頃に、土

御門の大納言様が女院の御在所に参上なさって、暁近

くなるまでそこでお過ついでこしになって、退出なさるので

あろうか、妻戸の聞く音がして、中門の方へ歩いてい

らっしゃると、御供の人も目を覚ましてすぐに月の見

える方に膝行なさって有明の月を御眺めになる。

梁元の昔の遊び 春王の月漸くに落ち

周穆の新たなる会 西母が雲帰んなむとす

と大納言様が朗詠なさるのを聞くと、

⑨見慣れて来た上皇様の面影の恋しさも、どんなに

か本当に深いことだろう、有明の月を見ていると。

と思われた。

〔補説〕本作品の登場人物で土御門院以外に特定できるのは源定通と承明門院在子の二人だけである。定通は通親男で母は範子。在子は通親養女で母は範子。二人は同母の姉弟である。通親一男通宗の娘通子が土御門院の妃となり、この間に生まれた皇子が後の後嵯峨天皇である。通子の父通宗は早く亡くなったため定通が通宗の猶子となって通子の後見をしていた。通子は承久三年八月に没し、同年閏十月には土御門院の配流と続いた。ここは院の配流という悲しみに沈む承明門院御所を、有明月の一夜同母弟定通が見舞ったという状況である。

定通は承久の乱後恐懼に処せられていたが、閏十月

九日許され、〔4〕の〔補説〕に記すように翌十日涙

ながらに院の出立を見送った。後に正二位内大臣まで

昇り、六十才で没する。『明月記』に「廉直の気あり、

末世の才卿なり」、『葉黄記』に「高才博覧の人なり」と記す。後嵯峨天皇の即位を画策した人物でもある。

承明門院在子は土御門天皇の即位によって建仁二年

(一一二〇二)院号宣下を受ける。『百練抄』によると、

建保二年(一一二四)仙洞御所である大炊御門京極殿

が火事になり、以後土御門院は母女院の御所土御門院

に同居していた。従って、女院の女房でありながら土

御門院と親密な関係になることもあった。作者がもと

もどちらの女房であったかは不明だが、院の寵愛を

受ける身となり、配流後もここに留まっている。女院

は正嘉元年(一二二七)八十七才で没するが、その御

所土御門殿はある意味で歴史的文化的拠点ともなった。

このような問題に関しては兼築信行氏「歌人達と社会―

七条院とその周辺―」(兼築信行・田淵句美子編『和

歌を歴史から読む』笠間書院、平成一四年一〇月)が

山崎：『土御門院女房』注釈（一）

ある。参照されたい。